

都市生活者が抱く農山漁村交流のニーズに関する一考察

ーニッポン全国“田舎”フェア来場者アンケート結果を中心にー

A Consideration on Urban-residents' Communication Needs to Rural areas:

Focusing on Results of All Japan INAKA fair Participants' Questionnaires

中尾誠二

Seiji NAKAO

要旨

団塊の世代が2007年から退職し始め、地方自治体はUターンや二地域居住による経済的波及効果を期待していたが、都市生活者にとって農山漁村の情報が不足しているため、農林水産省の外郭団体（都市農山漁村交流活性化機構）が東京・名古屋・神戸で「ニッポン全国“田舎”フェア」を開催した。三会場への来場者1765人から回答を得たアンケート調査の結果、次の点が明らかになった。

1. グリーンツーリズムへの参加においても「食」に対する関心が高い。
2. 五十代の女性は同世代の男性より田舎での「長期滞在」に関心がある。
3. 三大都市圏の生活者は田舎を楽しむ場所として共通して「長野県」に関心がある。

キーワード: グリーンツーリズム、食への関心、二地域居住、団塊世代、長野県

Abstract

In Japan, baby boomers started to retire from 2007. Almost all people living in urban area were originally born and brought up in rural area. After graduation, They moved to urban area and began to work there, had a family. So, local governments in rural area expected to their economical effects to own area. For example, having a second house in rural area or moving back to countryside, becoming new farmers, and so on.

But, urban residents don't have enough information about rural-side.

In the situation like this, "The Organization for Urban-Rural Interchange Revitalization" (this organization was established in 2001 by Japan Ministry of

agriculture, forestry and fisheries in order to promote Urban-Rural inter communication) held "All Japan INAKA fair" at three big cities in Japan (Tokyo, Nagoya, Kobe) in 2006. The purpose of this fair was giving urban residents chances to meet real "INAKA world (it means rural area surrounded by rich nature and green)" from all over Japan. Many actions in rural area like GreenTourism, CountryLife, DualLife, SlowLife, LOHAS, and so on.

At this fair, I and our staff researched urban-residents' communication need for rural areas by questionnaires. 1765 people answered these questions. I analyzed the results of these answers and found out three new topics.

1. They are very interested in "Food or Eating" even if they participated in GreenTourism.

2. Women aged about 50 have more concern about long staying in rural area than same aged Man.

3. Residents living in three big cities (Tokyo, Nagoya, Kobe) want to enjoy their country life in Nagano Prefecture. This trend was same in three cities.

Keywords: GreenTourism, Concern about Food, DualLife, BabyBoomer, NaganoPrefecture

1. はじめに

団塊の世代が大量定年退職を迎え始める年として、2007年は社会的に大きな変化をもたらす初年になるのではないかと注目された。特に、勤労者の多い都市から過疎等に悩む農山漁村への一時的もしくは恒常的な人口移動が関係各方面から期待された。2005年11月～12月に行われた世論調査でも、都市部の住民で「週末は農山漁村で過ごしたい」と答えた人は50歳代が45.5%と最も多く、更に、この世代のうち28.5%は農山漁村への定住も望んでいるとの結果が出ている^(注1)。また、安全で安心な食べ物への関心から広がってきた地産地消・スローフード・そして“スローライフ”の動きや、環境問題への意識の高まりから注目され始めている“LOHAS”(Lifestyles Of Health And Sustainability)といった概念も、これからの時代を示唆する重要なキーワードとなっていて、専門誌やネット上での情報も多く見受けられるようになった。

このような潜在的ニーズが都市生活者の間で高い一方、受け入れサイドの農山漁村で取り組まれているグリーンツーリズム^(注2)等の情報は、まだ十分に都市側へ浸透している状況とは言えないのが現実である。

そこで、両者を結び付けるためのイベント「ニッポン全国“田舎”フェア」が関東・中京・近畿の三大都市圏で2006年7～10月に開催された。このフェアを主催した都市農山漁村交流活性化機構で

は、都市と農山漁村の共生・対流を推進する「オーライ！ニッポン」国民運動の事務局業務を行っている。その一環として開催された当フェアでは、「グリーンツーリズム、田舎暮らし、スローライフ、LOHAS ～緑ゆたかな農山漁村で発見する新たな生活スタイル！」とキャッチコピーが設定され、会場となった東京・名古屋・神戸^(注3)の各都市圏を中心に事前告知を行って当日の誘客が図られたため、一般の来街者に加え多くの目的客が会場に足を運び、都市と農山漁村の活発な情報交換が行われた。各会場では、屋外に設けられた出展テントで地方自治体等による各地のPR活動が展開された。主催者側としても来場者属性や都市生活者ニーズの把握を目的として独自アンケートを実施し、名古屋 311 人・東京 654 人・神戸 800 人の合計 3 会場分 1765 人から回答を得た。

本稿では、これらの集計結果から導き出される傾向を詳細に分析するとともに、農山漁村で今後グリーンツーリズムを推進していく際の方向性に関して考察を試みる。

2. 先行研究の整理

都市生活者が抱く農山漁村交流のニーズに関しては、地域振興に関係する行政機関・団体や大学等により、アンケート調査を主な手法とする研究が既に様々な趣旨で実施されている。日本におけるグリーンツーリズムの基本法と言われる「農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律」が 1994 年 6 月 29 日に制定されてから、国内で様々な施策が本格的に導入され始めたが、それに先立つ 1993 年から年次を追って、主な調査をまず整理した。(表 1)

表 1 都市生活者のグリーンツーリズムに対する主なニーズ調査

調査年	調査対象	回答者数	主な論点	調査者(発表年)
1993	東京都内に職場を持つ勤労者	1071	年齢層が高くなるほど「農山村で休暇を過ごすこと」の関心が高くなる。	蒔油(1996)
1995	東京都特別区・横浜市・千葉市・大宮市・浦和市に住む18歳以上の人のうち都市部で生まれた人	603	農山漁村では「何もせずこれまでの貯えなどで気ままに暮らす」という都会での生活と異なる生活に対する憧れが強い。	中西(1996)
1995	大阪府下都市住民の成人男女	825	大阪府和泉市のような都市近郊の農山村でも休暇滞在中に宿泊を希望する人が大半を占める。	富樫ら(1997)
1995	a. 京都府美山町(現在は南丹市)を訪れた観光客 b. 受け入れ側集落住民	a. 407 b. 57	これから受け入れ側が取り組もうとしている農林業体験に対して、入り込み客の余暇活動ニーズは決して高くない。	神吉ら(1998)
1997	京都府の宮津市・美山町(現南丹市)・瑞穂町(現京丹波町)にある4箇所の宿泊施設へ都市から訪れた人	90	農村訪問者のニーズは「健康レジャー・自然観察・農作業体験・歴史文化・交流イベント」の5類型に分けて考えられ、農山村地域の自然資源管理には学習の視点を重視することが必要である。	北川(2000)
2001	奈良県明日香村にある国営飛鳥歴史公園と明日香の夢市(農産物等直売所)への訪問客	71	明日香村の自然や景観がリピーターを生み出している。	宇山ら(2002)
2001	兵庫県の津名郡一宮町(現淡路市)・波賀町(現宍粟市)・三日月町(現佐用町)・日高町(現豊岡市)・神崎町(現神河町)の宿泊施設等5箇所への来訪者	300	来訪者の行動パターンを食事買物型・農村満喫型・体型の3類型に分けられ、食事買物型が圧倒的に多く農村満喫型は少数派である。	田村(2004)
2002	a. 兵庫県による「ツーリズムバス事業」への参加者および「ひょうごふるさとまつりin西宮」への参加者 b. 県内で各種の受け入れ施設を経営している「ひょうごふるさと交流推進協議会」の会員	a. 408 b. 52	ツーリストは地域独自の体験を期待しているが、施設側はその提供意欲が弱い。	坂井ら(2003)
2003	岡山県吉永町(現備前市)八塔寺ふるさと村(総合都市農村交流施設)への来訪者	99	のどかな田園景観が魅力となっているが来訪時間が昼食時間帯に集中し滞在時間が短い。	真鍋ら(2006)
2004	新潟県塩沢町(現南魚沼市)にある農林漁業体験民宿32軒に宿泊した20歳以上の旅行者	279	スキーズン1～3月およびグリーンシーズン4～11月の両方に共通した通年型で人気があるのはコシヒカリや郷土料理を味わうこと。	桑原(2005)

出所:各引用文献

注:農林漁業体験民宿とは、農山漁村余暇法に基づき農林漁業体験民宿登録実施機関(都市農山漁村交流活性化機構)へ登録された宿泊施設のこと。

この表で分かるように、農業経済学・農村計画学をはじめとする様々な学会等で各種の先行研究が既に発表され、概括すると「農山漁村に対する関心は高齢者の方が高く、のんびり過ごしたり、食事を楽しんだり気軽な滞在を求めている。」といった点が明らかにされている。しかし、いずれの調査

も特定の限定された地域を対象とした調査であったり、アンケート集計のサンプル数が少なかったりする場合が多い。

これらと比較して今回の調査では、東京・名古屋・神戸の各地区それぞれ数百サンプルを集めている点、調査場所が農山漁村つまり着地側ではなく発地側であること、しかも三大都市圏という広範囲にわたっている点が大きな特徴である。特定の地域への来訪者を対象としていないため、いわゆる都市生活者の全般的なニーズを把握するためには非常に好都合である。また、目的客に加えて、会場を通りかかっただけの一般住民からも多くの回答を得られたため、非常に幅広い層の意見が集められたアンケート結果であると言える。

グリーンツーリズムの受け入れ側ではなく、訪問者側それも一般的な都市生活者が求めている本当のニーズを今回の調査ほど大規模かつ広範囲に行っている例は少ないので、従来なかった観点から詳細な分析を行。後述するが、その一つが「二地域居住」や「デュアルライフ」と表現される都市と農山漁村の両方に軸足を持った生活様式に対する関心度合いである。一般的なグリーンツーリズムの解釈としては、農山漁村への移り住む部分までは含まれないが、その前段階つまり都市から農山漁村へ足繁く通うスタイルについては、グリーンツーリズムの範疇として語られることが多い。もちろん数泊程度までの教育旅行や体験学習がグリーンツーリズムの主流部分として注目されているが、先行研究でも指摘されているように、実は農作業等の体験をせずとも「のんびり農山漁村に滞在する」ニーズが非常に高いことは筆者自身の実感としても強く感じる。その点についても、サンプル数の多い当調査の分析で明らかにしていく。

3. 調査実施概要

上述したように、今回の調査は名古屋・東京・神戸の各会場へ足を運ばれた来場者に調査員が直接アンケート票を手渡し、原則その場で記入してもらって回収する方法で行った。調査内容としては、属性（性別・年齢・職業・居住地）、来場契機、最も関心がある田舎の楽しみ方（日帰り・宿泊型・中長期滞在・移住）について3会場とも共通して尋ねた。この他に東京・神戸では、田舎へ泊りがけで旅行する時に最も優先する事項（食事・物産・イベント・宿・交流）、田舎体験を楽しむ場所として最も興味がある場所（都道府県・地域名）、誰と一緒に田舎体験をするか等についても質問項目に加えた。会場ごとの実施日数や場所は次のとおりである。

(1) 名古屋会場

- 日時：2006年7月8日（土）11:00～17:00 9日（日）10:00～16:00
- 場所：名古屋市中区金山1-17-1 アスナル金山「明日なる！広場」
- 特徴：名義共催の中日新聞社より広報面で協力を得て単独実施。名古屋市内公共交通機関のターミナル駅に設けられた複合ショッピング施設の屋外イベント広場で、一般の通行客や来街者が非常に多かった。

(2) 東京会場

- 日時：2006年10月14日(土) 10:00~17:00
- 場所：東京都千代田区大手町1-7-2 サンケイビル前広場「メトロスクエア」
- 特徴：NPOふるさと回帰支援センター主催「ふるさと回帰フェア 2006」会場内のグリーンツーリズム体験コーナーとして実施。会場は都心のオフィス街に設けられた屋外イベント広場で、普段の土日は閑散としているが、フェア当日は事前告知で多くの目的客が集まった。

(3) 神戸会場

- 日時：2006年10月28日(土) 29日(日) 11:00~17:00
- 場所：神戸市東灘区向洋町中2-22 六甲アイランド「リバーモール公園」
- 特徴：島内全域で各種イベントが行われる「六甲アイランドフェスティバル」の一環として実施。会場は20年ほど前に造成された職住隣接型の人工島で比較的高収入な現役世代の住民層が多い。

表2 回答者の属性 (単位:人)

会場		名古屋	東京	神戸	【合計】
回答者数		311	654	800	1,765
性別	女性	105	233	473	811
	男性	188	376	287	851
	未記入	18	45	40	103
年齢	10代以下	4	6	8	18
	20代	11	33	26	70
	30代	32	85	178	295
	40代	65	112	202	379
	50代	74	185	214	473
	60代	84	157	99	340
	70代	38	64	58	160
	80代以上	3	7	9	19
	未記入	0	5	6	11
職業	会社員	126	227	221	555
	公務員		43	35	97
	自営業	29	58	60	147
	パート	5	25	68	98
	主婦	57	107	278	442
	年金生活	61	71	61	193
	学生	9	11	13	33
	他	8	30	10	48
	未記入	16	82	54	152
居住地	愛知	249			
	岐阜	20			
	三重	12			
	静岡	3			
	東京		263		
	神奈川		59		
	埼玉		48		
	千葉		65		
	茨城		8		
	栃木		4		
	群馬		6		
	兵庫			532	
	大阪			49	
	京都			8	
奈良			3		
他	10	24	8		
未記入	17	177	200		

4. 回答者の属性

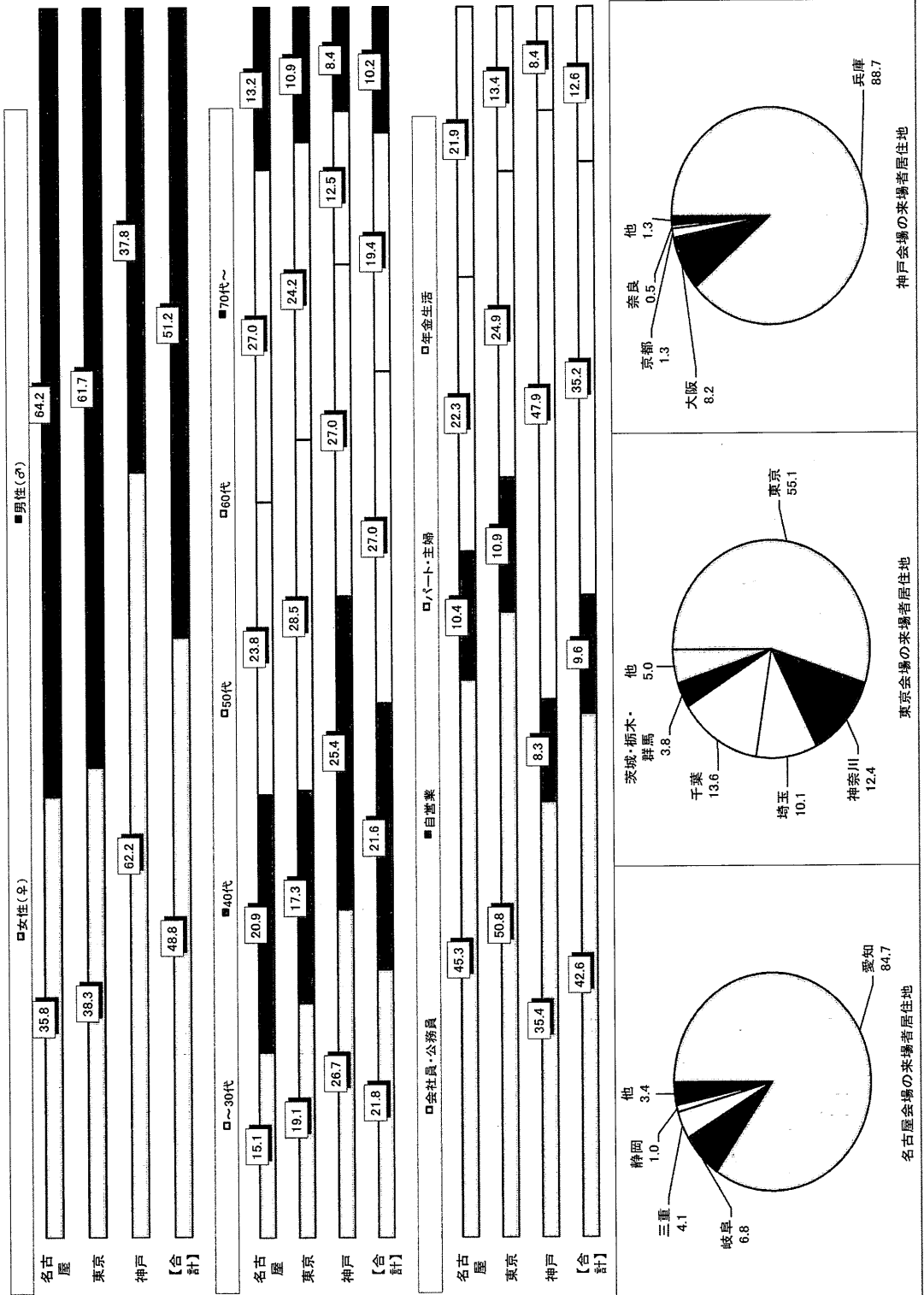
3会場で得られた回答者数は上述したとおり合計1765人で、会場ごとの性別・年齢・職業は(表2)のとおりである。集計の都合上、未記入等を除外し、少ない回答者群を集約したため、回答者比率は(図1)のようになった(注4)。

性別を見ると、名古屋・東京は男性が多かったが、神戸は女性が多かったため、合計では女性48.8%・男性51.2%という結果になり、ほぼ半々の割合であった。神戸は地元住民が多いという会場特性に加え、回答者への御礼品としてエコバック(他会場では田舎に関する書籍やPC再生用CD-ROM等のみ)

注：名古屋の調査では職業を会社員と公務員に分けなかったため、合計欄には東京・神戸での比率平均値を基に、会社員85%・公務員15%で配分した。

(単位: %)

図1 回答者の属性



も配布したことが、女性比率が高まった一因として考えられる。

年齢で見ても、神戸は他2会場に比較すると若く、所謂「働き盛りのファミリー世代」が多かった。合計すると50代が27.0%と最も多く、30代以下21.8%、40代21.6%、60代19.4%、70代以上10.2%と続いた。

職業で見た場合も、神戸はパート・主婦が47.9%と非常に多く、3会場の合計比率にも大きく影響を与えた。しかし、全体では会社員・公務員が42.6%と最も多く、続いてパート・主婦35.2%、年金生活12.6%、自営業9.6%という結果になった。

居住地では、名古屋と神戸ではそれぞれ地元県内在住者（愛知84.7%・兵庫88.7%）が圧倒的に多かった。東京も都内在住者は55.1%と他会場に比べると地元が少ない数字になったが、所謂「一都三県」と言われる都心への通勤圏（都内・神奈川・埼玉・千葉）の合計では91.2%となった。

5. 来場者アンケートの分析

アンケート調査は会場ごとに少しずつ異なった内容・質問数で実施したが、本稿で全ての集計結果を詳細に扱うことは困難なので、今回は特に顕著な結果であると考えられる以下3点についてのみ分析を行う。

5.1 食に対する関心

東京・神戸で尋ねた『泊りがけで田舎へ旅行する際に最も優先する項目は？』との質問に対して「①地域ならではの食事、②地域ならではの物産、③季節のイベントやレジャー、④宿泊施設の設備やサービス、⑤地域の人とのふれあい」と5つの選択肢を示したところ、両会場とも①の「食事」が最も多い結果となった（表3）。しかも、東京42.4%・神戸41.0%と両会場ほぼ同じ比率^(注5)であり、他選択肢と比較して圧倒的に高い関心を得ていることは、非常に特筆すべき点であると考えられる。他選択肢と比較して食事が重視されていることはクラスカル・ウォリス検定においても確認された。Scheffeの対比較（1%有意水準）では食事に対する回答分布がいずれの選択肢に対する回答分布とは異なっていることが示された。

従来、グリーンツーリズム推進にあたっては農林漁業体験や地域住民との交流が注目されがちであることは自治体等をはじめとする様々な機関での取り組み状況からも明らかである^(注6)が、“田舎”を前面に打ち出した今回のようなフェアへの来場者ですら、一般的な志向として「食べる」ことが最も大きな関心事であった訳である。つまり、“グリーン”が冠に付くとはいえグリーンツーリズムも「ツーリズム」すなわち旅行の一形態なので、田舎を訪問する側からは「体験や交流」より「食」という最も基本的な要素が重視されている、ということである。この結果に基づけば、供給者サイドである農山漁村の思いと需要者サイドの都市生活者が抱く交流ニーズとの間には若干のギャップが生じているのではないだろうかという点が推測されるため、より詳しく当質問に関する回答結果を分析してみることにした。

まず、上記結果の性別による違いがないか検証するため、会場ごとの回答者比率を確認した。まず、「食事」についての部分にだけ着目してみると、東京では女性 45.4%・男性 40.4%、神戸では女性 42.5%・男性 38.4%と、それぞれ女性の方が少しだけ重視している比率の高い点が共通していた。ポイント差も東京 5.0 ポイント・神戸 4.1 ポイントと近い結果になった。他の項目でも、「イベント」は女性が、「宿泊」と「交流」は男性の方が、それぞれ重視している点について両会場で共通していた。「物産」については東京と神戸で反対の結果となったが、ポイント差は東京 1.0 ポイント・神戸 0.9 ポイントと僅かであった。

次に、年齢による違いを同様に検証した。同じく「食事」を見てみると、両会場ともに 60

代のみ落ち込んでいることが共通していた。他の年代がほぼ全て 40%前後であるのに対して、60代だけは東京 32.2%・神戸 33.3%と目立って低い結果となった。それを埋めるようにして「物産」で60代だけ他世代より高い点が両会場ともに共通していた。他の年代がほぼ全て 20%前後であるのに対して、60代だけは東京 26.6%・神戸 27.8%と目立って高い値を示している。

更に、年齢と性別を組み合わせると両会場の結果を比較した。「食事」に対して両会場で共通する点としては、70代以上の女性が東京 52.6%・神戸 46.4%と最も関心が高く、60代の女性が東京 34.7%・神戸 30.9%と最低だったことである。50代の女性は東京 48.5%・神戸 45.5%と高い値を示していることから、60代女性の落ち込みが目立つ結果となった。この点については、食生活に対するシニア世代の健康志向（生活習慣病予防やアンチエイジング＝老化防止に関心が高い）といった各種の調査結果が当アンケートでも裏付けられる形となったのではないかと考えられる（註7）。

表3 泊りがけで田舎へ旅行する際に最も優先する項目は？ (①～⑤の単位:%)

属性	(人)	(%)	①食事	②物産	③イベント	④宿泊	⑤交流	
東京	595	44.4	42.4	22.0	17.0	17.5	18.8	
神戸	744	55.6	41.0	19.1	21.8	24.2	10.6	
東京	女性(♀)	229	38.5	45.4	21.4	20.5	16.6	18.3
	男性(♂)	366	61.5	40.4	22.4	14.8	18.0	19.1
神戸	女性(♀)	463	62.2	42.5	19.4	23.8	23.8	9.1
	男性(♂)	281	37.8	38.4	18.5	18.5	24.9	13.2
東京	～30代	116	19.5	47.4	20.7	22.4	11.2	12.1
	40代	102	17.1	45.1	17.6	21.6	11.8	16.7
	50代	172	28.9	45.9	22.1	13.4	24.4	17.4
	60代	143	24.0	32.2	26.6	14.7	18.2	26.6
	70代～	62	10.4	41.9	21.0	14.5	17.7	21.0
神戸	～30代	208	28.0	43.3	17.8	29.8	19.2	6.3
	40代	195	26.2	38.5	16.4	22.6	27.2	9.7
	50代	196	26.3	43.9	18.9	15.8	24.5	14.8
	60代	90	12.1	33.3	27.8	21.1	23.3	14.4
東京	70代～	55	7.4	43.6	20.0	10.9	32.7	9.1
	～30代♀	57	9.6	49.1	15.8	24.6	12.3	12.3
	～30代♂	59	9.9	45.8	25.4	20.3	10.2	11.9
	40代♀	38	6.4	44.7	13.2	21.1	15.8	10.5
	40代♂	64	10.8	45.3	20.3	21.9	9.4	20.3
	50代♀	66	11.1	48.5	22.7	18.2	27.3	19.7
	50代♂	106	17.8	44.3	21.7	10.4	22.6	16.0
	60代♀	49	8.2	34.7	26.5	14.3	12.2	28.6
	60代♂	94	15.8	30.9	26.6	14.9	21.3	25.5
	70代～♀	19	3.2	52.6	36.8	31.6	5.3	21.1
神戸	70代～♂	43	7.2	37.2	14.0	7.0	23.3	20.9
	～30代♀	155	20.8	43.2	16.8	32.3	19.4	5.2
	～30代♂	53	7.1	43.4	20.8	22.6	18.9	9.4
	40代♀	113	15.2	43.4	17.7	26.5	26.5	4.4
	40代♂	82	11.0	31.7	14.6	17.1	28.0	17.1
	50代♀	112	15.1	45.5	21.4	14.3	22.3	17.0
	50代♂	84	11.3	41.7	15.5	17.9	27.4	11.9
	60代♀	55	7.4	30.9	29.1	20.0	29.1	10.9
	60代♂	35	4.7	37.1	25.7	22.9	14.3	20.0
70代～♀	28	3.8	46.4	14.3	10.7	32.1	14.3	
70代～♂	27	3.6	40.7	25.9	11.1	33.3	3.7	

5.2 中長期滞在に対する関心

次に、名古屋・東京・神戸で共通して尋ねた『田舎の楽しみ方として最も関心があるスタイルは?』との質問に対して「①日帰りで遊ぶ(観光農園や農業体験など日帰り型スタイル)、②泊まって遊ぶ(農家民宿などに数泊するスタイル)、③田舎暮らしを体験する(週末帰農や滞在型市民農園などロングステイで楽しむスタイル)、④移り住む(いま生活している場所から移住して田舎へ定住するスタイル)」と4つの選択肢を示した結果については、①の「日帰り」が名古屋32.4%・東京35.2%・神戸39.1%と、最も多かった点は3会場で共通していた(表4)。しかし、次に多かった選択肢(名古屋と東京は③の「中長期滞在」、神戸は②の「泊まる」)とのポイント差は、名古屋9.2ポイント・東京3.5ポイント・神戸7.4ポイントと全て10ポイント以内であり、「日帰り」に対するニーズが特に際立っている訳ではなく、比較的バランスよく他選択肢にも回答が分散している結果となった。

今回のフェアは、宣伝用のキャッチコピーにも示されているとおり「グリーンツーリズムで短期的に農山漁村を訪れるスタイルから本格的な田舎暮らしまで」多岐にわたる都市生活者の交流ニーズに対応した情報発信を目指して実施され、それ相応の来場者層が集まってきていた訳だが、今ここで検証している質問内容は、農山漁村への移住に至る前段階とし

表4 田舎の楽しみ方として最も関心があるスタイルは? (①~④の単位:%)

属性		(人)	(%)	①日帰り	②泊まる	③中長期	④移住
名古屋		289	17.8	32.9	20.4	23.2	20.8
東京		593	36.5	35.2	26.0	31.7	19.1
神戸		744	45.8	39.1	31.7	25.3	10.6
名古屋	女性(♀)	103	35.6	36.9	24.3	20.4	14.6
	男性(♂)	186	64.4	30.6	18.3	24.7	24.2
東京	女性(♀)	227	38.3	39.2	28.2	28.6	15.4
	男性(♂)	366	61.7	32.8	24.6	33.6	21.3
神戸	女性(♀)	462	62.1	45.2	29.7	25.8	5.4
	男性(♂)	282	37.9	29.1	35.1	24.5	19.1
名古屋	~30代	47	16.3	51.1	12.8	19.1	10.6
	40代	60	20.8	43.3	15.0	25.0	13.3
	50代	71	24.6	18.3	16.9	29.6	33.8
	60代	74	25.6	18.9	31.1	23.0	25.7
	70代~	37	12.8	48.6	24.3	13.5	10.8
東京	~30代	115	19.4	41.7	22.6	25.2	19.1
	40代	104	17.5	42.3	32.7	20.2	21.2
	50代	173	29.2	28.9	24.9	37.6	21.4
	60代	143	24.1	30.1	25.2	35.7	18.9
	70代~	58	9.8	41.4	25.9	37.9	8.6
神戸	~30代	209	28.1	52.6	27.3	17.2	10.5
	40代	195	26.2	40.0	29.7	24.1	13.8
	50代	197	26.5	27.4	35.5	35.5	10.7
	60代	90	12.1	25.6	35.6	27.8	8.9
	70代~	53	7.1	49.1	35.8	18.9	1.9
名古屋	~30代♀	23	8.0	65.2	17.4	13.0	0.0
	~30代♂	24	8.3	37.5	8.3	25.0	20.8
	40代♀	26	9.0	46.2	15.4	26.9	7.7
	40代♂	34	11.8	41.2	14.7	23.5	17.6
	50代♀	24	8.3	16.7	20.8	29.2	29.2
	50代♂	47	16.3	19.1	14.9	29.8	36.2
	60代♀	19	6.6	5.3	57.9	10.5	26.3
	60代♂	55	19.0	23.6	21.8	27.3	25.5
	70代~♀	11	3.8	54.5	9.1	18.2	9.1
	70代~♂	26	9.0	46.2	30.8	11.5	11.5
東京	~30代♀	57	9.6	43.9	21.1	21.1	19.3
	~30代♂	58	9.8	39.7	24.1	29.3	19.0
	40代♀	39	6.6	43.6	30.8	23.1	12.8
	40代♂	65	11.0	41.5	33.8	18.5	26.2
	50代♀	66	11.1	30.3	30.3	40.9	18.2
	50代♂	107	18.0	28.0	21.5	35.5	23.4
	60代♀	50	8.4	38.0	26.0	28.0	14.0
	60代♂	93	15.7	25.8	24.7	39.8	21.5
	70代~♀	15	2.5	53.3	46.7	20.0	0.0
	70代~♂	43	7.3	37.2	18.6	44.2	11.6
神戸	~30代♀	156	21.0	54.5	28.8	18.6	5.8
	~30代♂	53	7.1	47.2	22.6	13.2	24.5
	40代♀	112	15.1	50.9	26.8	24.1	6.3
	40代♂	83	11.2	25.3	33.7	24.1	24.1
	50代♀	112	15.1	32.1	33.9	36.6	5.4
	50代♂	85	11.4	21.2	37.6	34.1	17.6
	60代♀	56	7.5	32.1	28.6	28.6	5.4
	60代♂	34	4.6	14.7	47.1	26.5	14.7
	70代~♀	26	3.5	50.0	30.8	23.1	0.0
	70代~♂	27	3.6	48.1	40.7	14.8	3.7
名古屋・東京・神戸	~30代♀	80	9.1	50.0	20.0	18.8	13.8
	~30代♂	82	9.3	39.0	19.5	28.0	19.5
	40代♀	65	7.4	44.6	24.6	24.6	10.8
	40代♂	99	11.2	41.4	27.3	20.2	23.2
	50代♀	90	10.2	26.7	27.8	37.8	21.1
	50代♂	154	17.5	25.3	19.5	33.8	27.3
	60代♀	69	7.8	29.0	34.8	23.2	17.4
	60代♂	148	16.8	25.0	23.6	35.1	23.0
神戸	70代~♀	26	2.9	53.8	30.8	19.2	3.8
	70代~♂	69	7.8	40.6	23.2	31.9	11.6

て③の「中長期滞在」について、実際どのような需要があるのか調査する意図をもって設定されている。当日の出展団体テントも「田舎で遊ぶ・泊まる・暮らす」という3テーマに分類して配置されたが、「泊まる」から「暮らす=移り住む」までの間を埋める選択肢として「田舎暮らしを体験する=中長期滞在」が加えられた訳である。その意味で、名古屋・東京の2会場で「中長期滞在」が2番目に多い結果となったことは、予見していた交流ニーズが数字となって実証されたと言える。

神戸は現役世代が多いという来場者属性もあり、④の「移り住む」ニーズは3会場の中で最も少なかったが、「中長期滞在」は25.3%と名古屋23.2%よりも多い値であった。逆に名古屋は「移り住む」が20.8%と3会場で最も多かった。なお、「中長期滞在+移り住む」で計算してみると、名古屋43.9%・東京50.8%・神戸35.9%という値になり、やはり「ふるさと回帰」という大きなテーマで強力な事前PRが行われた東京が最も多い結果となった。これら3会場ごとの数値差は実施前の告知度合や会場特性も大きく影響してくると思われるが、35~50%という割合で「農山漁村への中長期滞在・移住」について関心を持たれていることは参考となる値である。

更に、当質問への回答結果を年齢・性別を切り口として分析してみた。まず、性別で3会場における「中長期滞在」と「移り住む」の結果について見てみると、ほぼ「女性<男性」であることが分かる。神戸の「中長期滞在」だけ逆転しているがポイント差は1.3ポイントと僅かである。次に、年齢で見ると、神戸の「移り住む」以外は全て「50代」が最も多いことが分かる。これは本稿冒頭で引用した世論調査(注1)が当アンケートの結果でも裏付けられたと言える。ここまでは一般的な認識と同じであるため納得いく結果であったが、年齢と性別を組み合わせると、「中長期滞在」に関心のある50代は「女性>男性」という意外な結果が2会場(東京5.4ポイント差・神戸2.5ポイント差)で得られた。名古屋は0.6ポイント差で男性の方が多かったが、3会場を合わせた全体は4.0ポイント差で「女性>男性」という結果になった。これは、「移り住む」が全ての年齢で圧倒的に男性の方が多いという一般的に流布している常識に沿った結果であることに比べて、非常に特筆すべき点であろう。週末帰農やデュアルライフ(二地域居住)等の推進にあたっては、従来あまり重視されていなかった50代の女性もターゲットとして明確に意識することが必要ではないかと考えられる。

5.3 田舎を楽しむ場所として人気のある県

最後に、『田舎を楽しむ場所として最も関心のある地域名は?』との質問に対する結果を見てみる。当フェアでは東京・神戸2会場での設問だったが、名古屋でもプレ企画(2006年5月3~5日に名古屋市中区栄の久屋大通公園で行われた中日新聞社ふるさと農林水産フェア春)来場者に同じ質問をして709人から回答を得ている。

その結果について上位3県を見ると、名古屋では「岐阜県27.5%・長野県26.4%・愛知県16.1%」、東京では「長野県13.6%・福島県5.7%・北海道5.4%」、神戸では「長野県15.1%・兵庫県14.9%・北海道10.8%」となっていた。

この3会場における結果を並べて見ると、長野県が三大都市圏で共通して人気の高いことが分かる。

名古屋でのみ第2位となっているが、第1位との差も0.9ポイントとわずかであった。この都市側ニーズに関しては、長野県も現実の商圈として東名阪を意識していると思われ、実際このフェアでも3会場へ全て出展している^(注8)。

6. おわりに

ここまで来場者アンケート結果のうち3点について検証してきた。最後の「長野県」は、各地域でグリーンツーリズム推進の戦略を考える時に最も基本的な段階として、まず最初に集客範囲つまりターゲットとなるエリア（特に都市生活者が住んでいる範囲）を見定めることが非常に重要であることの一例として取り上げた。そして、当然その都市生活者が訪問先となる農山漁村地域に何を求めているかという点も重要であるため、「食に対するニーズの高さ」や「中長期滞在に関心ある世代の性別特性」の2点についても分析を試みた。

今回のアンケートで三大都市圏生活者が農山漁村に対して抱く交流ニーズの一端が明らかになった。行政機関等においてグリーンツーリズムが推進される場合、従来の業務系統の関係から農林漁業セクションからアプローチされることが多いが、そのため必然的に“農林漁業”との関係性が強く前面に出てきたり、また必ず「何らかの農林漁業体験」を行わねばならないという強迫観念にも似た解釈が多くの現場で見受けられる。

しかし、ここまで述べてきた結果から分かるように、来訪する側としては旅の最も基本的な楽しみである「食」に対するニーズが高いので、それを念頭に置きながら受け入れ態勢を確立していく必要があると思われる。近年「農家レストラン」がブーム的に取り上げられていることや「食育」が非常に注目されてきている状況（野田 2006）も踏まえて、例えば農業体験であれば断片的な農作業の一部分だけで終わらせることなく、その生産現場から収穫された農産物を必ず「食べる」段階まで含めて実施する等の工夫が求められる。つまり、“農林漁業”だけの体験から脱却し、「食べる」行為を生産から楽しめる“農山漁村”そのものの体験へと意識を変えていくことが肝要である。

また、団塊世代をはじめとした今後リタイアして農山漁村へと関心が向かう（矢口 2007）であろう層についての性別差も、従来は見落とされていた「女性」へ改めて着目すべきであろう。例えば滞在型クライנגルテン（小屋付き農園）も、大都市圏に近い人気ある施設では何年も待たねば利用できないという状況が続いているが、やや交通アクセスが悪かったり値段が高かったりすると、なかなか利用者が埋まらない事例も散見されるので、このような場合に50代の女性をターゲットとしたPRを戦略的に行う等の対策も一つの案として検討に値すると思われる。特に女性雑誌は読者層となる年代が非常に細かくセグメンテーションされているので、限りある広告費を効率的に配分する面でも有効であろう。

以上、今回のアンケート調査に基づいて、限られた点のみではあるが、若干の考察を試みた。農的志向の強い都市生活者が田舎暮らしに至るまでの入り口として、軽い気持ちでグリーンツーリズムに参加して農山漁村との接点を持ち、段階的に関わり方を高めていくことは、現実の様々な要因を考

ると最も適切な形である。そのためには、時代と共に変わりゆく都市生活者の交流ニーズを今後も更に調査・分析し、それらの情報を的確に農山漁村へフィードバックすることが必要である。その意味で、本稿は「都市と農山漁村の共生」を推進するにあたっての重要なポイントの一部を明らかにすることができたものと確信している。

《注》

(注1) 詳細結果は内閣府(2005)2i5-6参照。

(注2) 農林水産省は「グリーン」と「ツーリズム」の間に外来単語の区切り文字として中黒点(・)を入れた「グリーン・ツーリズム」を正式用語としているが、一般的には「毎日新聞グリーンツーリズム大賞」のように続けて表記することも多い。また「農協観光グリーンツーリズム・教育旅行課」のように併記単語の区切り文字としても中黒点がいわれている場合、農林水産省方式では「グリーン・ツーリズム・教育旅行課」と表記されてしまうため非常に読み難い。実際には中黒点の有無による厳密な意味の差異も存在しないため、本稿では全て「グリーンツーリズム」という表記に統一する。

(注3) 本稿では以後、この3都市名を注釈なく単に使う場合は全て当フェア実施3会場を意味する。

(注4) 本稿では全て同様な有効回答者比率で論を進める。

(注5) 同一属性を持った有効回答者内での比率。なお、1つの項目を選択するよう設定された質問であっても複数回答されている調査票が多かったため、以下で扱う全ての比率の合計値は100%にならない。

(注6) 例えば、福井県大野市(2007)が市内でグリーンツーリズム活動を実施している25団体から対象に行った現在の取り組み内要に関する調査でも、農林業体験が31.4%で最も多かった。

(注7) 例えば、京浜・京阪神に住む20~69歳の主婦から得られたネット調査による回答を分析した栗原(2007)を参照。

(注8) 名古屋への出展団体は、福井：ロハス越前(越前市)、長野：売木村・白馬村・飯綱町・県グリーンツーリズム協議会、岐阜：高山市・飛騨市・東白川村、愛知：田舎暮らし支援センター(南知多町)、三重：県心豊かな里づくりネットワーク、京都：府農業会議、長崎：長崎市の7府県12団体。

東京への出展団体は、北海道：自然体験学校(豊頃町)、福島：喜多方市・会津坂下町・県南会津地方グリーンツーリズム推進会議、群馬：ぐんまのグリーンツーリズム、埼玉：県、石川：県、福井：県、山梨：えがおつなげて(北杜市)、長野：白馬村・県グリーンツーリズム協議会の8道県11団体。

神戸への出展団体は、北海道：中頓別町・自然体験学校(豊頃町)、福井：かみなか農楽舎(若狭町)・県、長野：県グリーンツーリズム協議会、三重：熊野市・モクモク手づくりファーム(伊賀市)、兵庫：ふるさと応援隊(南あわじ市)・和歌山：県、徳島：伊座利漁協(美波町)、愛媛：内子町・県南予、高知：四万十市西土佐地域、長崎：長崎市・県、広域：四国グリーンツーリズム推進検討会(徳島/香川/愛媛/高知4県)・近畿中国四国農政局・チャレンジ!ファームスクール(農林水産省)の以上11道県18団体。

《参考文献》

- (1) 宇山満・浦出俊和「奈良県明日香村におけるグリーンツーリズムの効果と問題」『近畿大学農学部紀要』Vol. 35、pp. 31-41 (2002)
- (2) 神吉紀世子・三宅雅美・宗田好史「グリーンツーリズムの現状と課題—京都府美山町における入り込み客/地元の意識調査から」『運輸と経済』第 58 巻 2 号、pp. 53-60 (1998)
- (3) 北川太一「農村訪問者および地元住民による農村の評価と自然資源の管理」『環境保全と交流の地域づくり』pp. 154-167、昭和堂 (2000)
- (4) 桑原考史「グリーンツーリズムの観光的位置づけに関する考察—新潟県塩沢町の事例分析—」『2005 年度日本農業経済学会論文集』pp. 205-210 (2005)
- (5) 栗原千明「558 世帯の食卓を調査 (キッチンダイアリー)」株式会社インテージ マーケティングソリューション開発部ニュースリリース (2007)
- (6) 蒔油義郎「グリーンツーリズムの展開」『農業土木学会誌』第 64 巻 8 号、pp. 751-755 (1996)
- (7) 坂井謙介・林まゆみ・平田富士男「兵庫県における交流・体験ツーリズムの研究」『農村計画論文集』第 5 集、pp. 217-222 (2003)
- (8) 田村剛「グリーンツーリズム施設来訪者の行動に関する一考察—兵庫県を事例として—」『農林問題研究』第 154 号、pp. 91-96 (2004)
- (9) 富樫穎・米原慶子「都市住民のグリーンツーリズム需要に関する研究—大阪府下都市近郊農山村に対するグリーンツーリズム需要—」『日本建築学会計画系論文集』第 497 号、pp. 117-122 (1997)
- (10) 内閣府大臣官房政府広報室「都市と農山漁村の共生・対流に関する世論調査」(2005)
- (11) 中西憲雄「大都市住民の農村像と市町村における農村・都市交流活動の現状」『農業土木学会誌』第 64 巻 8 号、pp. 757-764 (1996)
- (12) 野田知子「米づくりを通じた学校教育支援と地域活動の可能性と課題」『ESD 環境史研究:持続可能な開発のための教育』Vol. 5、pp. 178-179 (2006)
- (13) 福井県大野市「エコ・グリーンツーリズム調査報告書」p. 17 (2007)
- (14) 真鍋奈津子・星野敏「岡山県八塔寺ふるさと村の課題と展開方向—グリーンツーリズム開発地区の課題と再生方策に関する事例的考察—」『農村計画学会誌』第 24 巻 4 号、pp. 245-253 (2006)
- (15) 矢口芳生「共生社会システム学序説—農業経済学からの接近—」『共生社会システム学序説—持続可能な社会へのビジョン—』pp. 110-111 (2007)

※ 本稿で扱った「ニッポン全国“田舎”フェア」は、筆者の前職時代(2006年度)農林水産省グリーンツーリズム情報発信機能強化事業として実施した催事で、来場者アンケート結果も概要については既に同省農村振興局へ報告しているが、本稿は詳細分析を中心に取りまとめたものである。